

の本文。

- ① (98-2) ちり残たる
- ② (104-5) 夜塩さす
- ③ (108-6) 十五日
- ④ (110-5) 朝霧
- ⑤ (123-4) 三十三年

ちりたる  
夜々ほさす  
十九日  
朝霧  
三十年

しかし、逆に、内15本に一致せず、他の諸本に一致するものも多い。次に少し列挙しておく(上段は、尊9本・諸本、下段は内15本の本文)。

- ① (87-2) 袖ぬれぬ(丹本は、袖なれぬ)
- ② (89-3) おほえし
- ③ (99-8) 一讀とありしに(諸本間に少異)
- ④ (125-7) 八日
- ⑤ (125-10) 十日

袖ねれて  
おもひつゝけし  
一讀とすゝめられしに  
十八日  
十九日

この一致は、先掲の、詞書などの大きな異文でも同様であった。

以上のように、尊9本は、内15本に重なる面と、書本系に重なる面を有するが、さすがに、正広の手をへている素性のよい伝本だけに、脱落歌や誤写も少ないようである。ただ、独自異文には不審なものもあり、歌順では、(88-8~9)の「秋風」と「秋鐘」が逆順、(94-2~3)「同時よみ歌に」が「寄神祝」の前に位置するなど、妥当とおもわれぬものもある。

以上、巻二の諸本に関して、問題箇所を中心に論じてきたが、書・竜・穂・金のグループは、巻一と同様であるが、一本は巻一と相違し、穂本などに近いこと、内15本は、別系統の伝本であること、そして、尊9本は、内15本と他の諸本、それぞれに重なる面と離れる面のあることが指摘できた。

今回は、紙面の都合もあって、巻二までにとどめ、次回に以下の諸巻に

検討を加える予定である。

補注1、脱稿後、久保田淳氏の御好意で、拝見することができたが、第一種に所属する伝本であった。

補注2、丹本校合の「一本」は、この「法のむしろ」の部分に関する限り、扶桑拾葉集系の本文を混入させている。

(昭和四十八年四月十六日受理)

巻一と同様である。ところが一本の本文は、第4表の欠如歌でも予想されたことであるが、本文異同でも、巻一の場合と、きわだつて変様している。田中氏の調査では、一本による校異数との一致が、巻一では、穂本26%、書本35%であったのに対し、巻二では、穂本66%、書本61%と増加しているのである(二)論文)。例えば、穂・金にのみ共通する異文、①(110-10)冬哉(丹は、木枯、他本は、冬枯、但し、扶桑本は冬哉)②(125-8)ふかき(丹はぬる、他本は、なる)などが、一本と一致する例をみても、穂・金本に比較的近い位置にあるように思われる。田中氏の実証された通りである。

次に問題となるのは、内15本である。内15本は、巻一でも、他に同系統がなかったが、巻二でも同様である。まず、詞書などに、かなり大きな異文の存することである。そのうち、五例ばかり列挙してみる(上段が内15本、下段は他の諸本の本文)。

- ① (97-8) その夕つかた月をみて  
其夕つかた春夕月と云題を各(丹本ナシ)ととりて
- ② (115-10) 墨染に  
墨の袖のやうに  
歌よみし中に
- ③ (120-9) 一統ありしに  
ことのはなく
- ④ (130-7) ことの葉をよひかたく  
景積清阿弥など身まかりしかは
- ⑤ (131-9) 景積といふ僧清阿弥な  
りしかは

かかる異同は、他にも若干あるが、すべて、単純な誤写とは考えられない面がある。例えば、①②など、諸本本文より、内15本のように書きかえられることはあつても、内15本から諸本のように書きかえたい。逆に、⑤などは、前後の文脈からみて、内15本の本文の方がはるかに意味が通ずる。正広の手をへた尊9本でも、下段の本文であることを思うと内15本が、それらと系統を異にするものではないかと考えられてくる。さらに、これと関連するが、巻二の永享二年の詠草にのみみられる特異な表記とし

て「おなし時の読歌の中に」「同時よみ歌の中に」というものが、二十八箇所あることである。これは、月次会開催の後に、当日、その場で、詠歌した歌の指示で、「当座」といつてよいものであろう。ところが、内15本では、この表記はなく、ことごとく「当座」となっているのである。「草根集」の他の諸巻だけでなく、この巻二の、永享元年、四年でも、かかるケースには、「当座」と表記しているので、永享二年詠草のみの特色といえる。従つて、当然、この「おなし時の読歌の中に」をすべて「当座」に統一してしかるべきであるが、尊9本はじめ、諸本は、わざわざ「おなし時の読歌の中に」と表記しているのである。この不審な現象をどう理解すべきであろう。内15本系の筆者が、他の表示と統一して「当座」に変更したということはずいぶん考えである。素稿本に「当座」とあるものを、この永享二年の年次に限り、わざわざ「おなし時の読歌の中に」と表記するとは考えがたいからである。おそらく、定本でも、諸本のようにあつたらう。しかし、これをもって、内15本の表記が、後人の書きかえであると断定はできない。先の異文でもわかるように、内15本には独自のものがある。正徹の日次形式の叙述方式が、「おなし時の読歌の中に」ではなく、「当座」であつたらうことを思うとき、永享二年詠草(先述したように、類火以前の年次)の流布とも関係をもつてくるようである。内15本には、例えば、「わ(は一本)つかなるとしをへたつる程に(ナシ一本)もあらず家もあるしも(110-5-4)、「心しつかにむかし物語などして(115-10)などのような、大きな脱文もあるが、独自異文のなかには、案外、素稿本の本文を伝えているのではないかと思われるものもあり、特異な系統本である。

次には、尊9本の検討が必要である。この本は、文明六年五月、正広の手をへた系統本の忠実な書写本として、素性のはっきりしたものである。その本文を諸本間と比較すると例えば、ごく主要な異同に着目しても、内15本と一致するものが目立つ(上段は、内15本・尊本、下段は、他の諸本

各々の伝本の性格に関しては、最後に総合的に述べる予定なので、ここでは個々の事象を検討するにとどめる。

## 五 卷二について

卷二は、日次形式で、永享元年、二年、四年の各年次の詠草で構成されている。正徹は、永享四年四月に草庵の類火にあい、それまでの詠草類を灰燼にきしたといっているが、永享元年、二年のものは、偶々、類火をまぬがれたものか、それとも、弟子などの手元に転写されて残っていたものであろうか。

この卷二を所持する諸本には、卷一同様、丹・書・竜・穂・金・内15の各本のほか、文明六年五月の正広の奥書をもつ系統本である、尊9本がある。卷二は、諸本間に、歌の出入りも少なく、比較的異同の少ない巻である。

まず、歌の出入りからみておく。二本以上に共通する欠如歌をとりあげたが、内15本のみにもみられる二首も同時に表示しておく。

第4表

| 番号 | 所在          | 歌題  | 初句    | 内丹 | 書 | 竜 | 穂 | 金 | 尊 | 一本 |
|----|-------------|-----|-------|----|---|---|---|---|---|----|
| ①  | 86-1<br>-2  | 山家月 | いなり山  | ○  | ○ | ○ | × | × | ○ | ×  |
| ②  | 96-9<br>-10 | 古寺藤 | さきかゝる | ○  | × | ○ | × | × | ○ | ×  |
| ③  | 107-7       | 深雪  | まてしはし | ○  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○  |
| ④  | 115-2       | 連日雪 | ふるまゝに | ×  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○  |

この四首は、尊9本などのように、本来、あってしかるべきもので、諸本にある欠如は、書写間における単純な脱落であろう。

第4表でも、書・竜、および、穂・金のグループの一致は卷一同様であるが、丹本と一本(校合を信ずる限り)が、穂・金と一致する点に注意される。③④の内15本にのみみえる脱落歌は、共に歌題は存するが、歌本文が無い。どちらも、丁の移り目にあたるので、内15本の書写者あたりの誤写によるもので、問題にならない。

次に問題となるのは、永享元年四月三日の条に「右馬頭の家にて法案として百首の題を分て読侍る後にきけは飛鳥井宰相雅世に合點所望有しとなり」と、十三首の歌を列挙するが、その合点記号の有無である。丹本には、六首に合点があるが(活字本は、版本にある合点を翻刻していない)、書・竜・尊の各本にも同様にある。しかし、内15本や、穂・金の各本にはみえない。正広の手を経て、尊9本にあるところからみても、定本にもこの合点があつたろう。但し、穂・金は、単純に合点を脱落させたのであろうが、内15本の場合は、その祖本になかつたかもしれず、単純には判定できない。

次に「草根集」の成立に関連するものを紹介しておく。永享二年十月十九日の次に、北野松梅院の女方より和歌が送られ、その後、いわゆる「扶桑拾葉集」にも所収の「法のむしろ」の一文が(丹本版本で3丁余)続く。

「法のむしろ」は、「扶桑拾葉集」のほかには、島根大学附属図書館蔵原文庫の「定家卿歌道初心」(上下二冊)の下冊にも収められている。問題は、「法のむしろ」の末尾に「草根集」にみえない一文(和歌一首を含む)がみえることである。この一文は、現存「草根集」のどの諸本にもみえないので、「法のむしろ」は、「草根集」からの抜書でなく、正徹が生前、独立させて某人に与えたものと考えられる。これは「草根集」の成立や資料収集の問題ともかかわるので、別に考察する予定であるが、本文校合に加味できるので、ここで少し触れておいた。<sup>補注2</sup>

さて、ここで、本文異同等をも考慮して、各伝本の相互関係を指摘しておきたい。書・竜の関係、穂・金の関係、およびこの四本の関係は、

歳」の注記はない。

さらに、この定数歌には、為尹卿と宋雅の合点があるが、諸本によって、右の合点数が次のように相違する。

丹・穂・金 → 13首  
書・竜 → 12首  
内15・「抄」 → 11首

これは、すでに考証したように（「草根集」の定数歌について）、「11首」が本来のもので、内15本や「抄本」が正しい。また、内15・穂・金には、実際に歌に合点が施されていないが、これも、丹・書・竜の各本のように、本来、あつてしかるべきものである。

最後に、巻一の諸本の本文（歌および歌題）を校合してみると、相互にかなりの数の異点があるが、その大部分は、一〜二字程度の異同で、誤写その他によって生じたもので、推敲などをへた、大幅なものはない。

以上、巻一における諸本間の、主たる問題箇所に着目し、その実体から、原本や定本の復元を中心に述べてきたが、最後に、各伝本の分類や位置を、本文異同の結果も参照しながら試みたい。

これまでの検討で容易に判定できるのは、書・竜の両本が、分巻形式、序文の本文、欠如歌の一致、署名、合点数など、すべて一致し、極めて近い伝本であるということである。これは、本文異同でもいえることで、両本の異同は、極めて少ない。

次に、穂・金の両本も、分巻形式、序文の本文、欠如歌（但し金本は他に一首あり）、署名、合点数など一致し、本文異同も少ない。両本の巻十五の奥書の一致からみても、極めて近い伝本であることは確実である。

さらに、この四本は、内15本、丹本、一本に比較すれば、四本間で四首もの共通の欠如歌があるなど、比較的近い関係にある。

丹本は、序文の「正徹老人」、署名、合点などからみて、内15本や一本

よりこの四本に近い点もあるが、やや異質なものがある。

校合の一本の位置に関して、田中氏は、巻一における、118の校異数と、内15本、書本、穂本との一致率を出され、穂本26%、書本35%であるのに対し、内15本とは51%も一致することを実証された。即ち、巻一の諸本の中では、どちらかといえば、内15本に近いことになる。このことは、本文異同に注目して、例えば、内15本と一本が一致するもので、異同の大きなものをとりあげても（上段は内15本・一本、下段は他の諸本の本文）

- ① (47-1) こなたかなた  
かなたこなた  
空  
② (62-1) 影  
恨みて  
③ (68-6) 招きて  
恨みて  
④ (70-9) 倍日吉  
侍日吉  
⑤ (75-7) 関へたゝるは  
関やへたゝる

のごとく、実証できるが、先の51%の一致率などが示すように、全くの同系統とはいえないようである。また、一本校合のなかには、①(17-7)落花（他本は、惜花）、②(21-9)秋の浦（淡路かな）③無常（哀傷）などのように、単なる誤写とも思われぬものがあるが、これらは、「草根集」の本文でなく、「続撰吟抄」系の独立伝本との校合による「一本イ」としての本文であると思う。

また、内15本は、これまでの検討でもかなり独自の系統であることがわかるが、本文異同でも、その良し悪しは別として、独自異文も多い。

最後に、これら諸本を、序文付加以前の姿を伝える「抄本」と比較してみる。

「抄本」の明らかな誤脱は除き、また歌本文に限り、内15本、丹本、書本との校合を行い、38箇所をみつけたが、各本における一致は、書本が14箇所、内15本が10箇所、丹本8箇所で、「抄本」の独自本文21箇所が目立つばかりで、きわだった結果はでてこない。数の上では、書本に近いことになるのだが、内15本にもみがせない一致がある。

それにしても、定数歌のうちで、なぜ、かかる不可解な現象が生じたのであろうか。この「明やらぬ」の歌は、他人の歌か正徹の歌か。そこで、この百首の独立伝本である、薬師寺本と内閣文庫蔵「賜蘆拾葉」所収本とを検討すると、この「暁郭公」の歌題歌は、「横雲を」でも「明やらぬ」でもない、全く別の

ほととぎす曉はかりうきものもおもひそかへす  
在明の聲の歌であった。この疑問に対し、かつて私は、

「草根集」の歌が先に創作され、後に独立伝本のような歌をあてたとみる。その理由は「草根集」系の歌では「暁郭公」の歌題に適切に応じているとは思われないこと。特に、この次にある「夕郭公」「夜郭公」と並ぶとき「やすらひあかす」だけでは、「暁郭公」の歌題の本意を十分に發揮しているとはいえない。その点、独立伝本の歌は、「曉はかり」とか「在明の聲」で、題意は明確にされている。(前掲「草根集」の定数歌について)

とし、後の推敲による換置歌とみたのである。この事実からしても「暁郭公」の歌は、正徹自身、幾度か推敲することがあったと推測される。「明やらぬ」の歌も、そういった背景をもつ歌ではなからうか。

しかし、巻一の諸本のすべてに「明やらぬ」の歌がみえず、一本のみにみえるのは不審である。一本の特異性といえはそれまでであるが、「横雲を」の歌が一本に無いという注記はされていないところからすると、一本は、他の独立伝本との校合の過程で、「一本イ」として追記していたのかもしれないが、なお問題は残る。

次に歌順のことであるが、諸本に比較し、丹本に、次の三箇所異同がある。

- ① (15頁) 「旅宿」が「田家煙」の次にあるが、諸本は「旅行」の次。
- ② (31頁) 「水鳥」「千鳥」の順序だが、諸本は「千鳥」「水鳥」。
- ③ (36頁) 「叢虫」「初雁」の順序だが、諸本は「初雁」「叢虫」。

この三箇所の歌順は、定数歌の歌題配列に比較しても、丹本の方が妥当でない。本来、諸本のごとく配列されてしかるべきである。

次に、第2表の定数歌のうち、冒頭の表題の下に正徹の署名を記したものが幾篇かあるが、この問題に触れておく。(これは、田中氏も着目されている。〔論文〕)

①の「釋正徹」は諸本にあるので除外し、丹本で「原本ニナシ一本ニアリ」とする署名は、次の四つである。

- ③の百首 「千松末葉釋正徹」
- ⑤の百首 「千松末葉釋正徹」
- ⑥の百首 「釋正徹」
- ⑩の百首 「釋正徹」

この四つの署名は、丹・竜・書・穂・金の各本にみえないが、内15本にはみえる。「草根集」は、正徹の歌集なので、各定数歌ごとの署名は不必要である。にもかかわらず、この署名を残しているのは、巻一として編集するとき、もとの百首懐紙の署名を、そのまま記入した名残りともみるのが妥当な見解であろうか。その意味では、一本や内15本は、素稿本の姿を伝えていることになり、他の諸本は、不必要のために省略したとも考えられる。但し、正広の手をへた「抄本」には、この署名がないので、定本ではなかったことも考えられる。

この署名と関連して、あと一つ問題となるのは、②の定数歌の末尾の「応永廿三年六月十九日清岩三十六歳」である。傍点部分の注記は、「抄本」はじめ、諸本にすべて存するが、ただ、一本のみみえない(活字本は、版本にある「ナシ一本」を翻字してない)。正徹自身の懐紙に、かかる注記があるのは不審であり、誰れかの追記と思われるが、正広は、その料紙の記載のままにとり入れたのであろう。おそらく定本にも存在した注記ではなからうか。一本にないのは削除したものか。因に、この②の定数歌の独立伝本である、尊経閣文庫本「清蔵百首并五十首」には、「清蔵三十六

したと推測される。但し、「られ」の有無は、どちらが本来のものか断定できない。どちらの場合も妥当な文脈として定着していないことは先に触れた通りである。

次に歌の出入りについて、主として二本以上にわたる欠如歌を表示すると第3表のごとくなる(校合の「一本」も、校合された範囲を信じて加えてみた)。

第3表(○は存在、×は欠如)

| 番号 | 所在 | 歌題   | 初句    | 内丹 | 書 | 竜 | 穂 | 金 | 一本 |
|----|----|------|-------|----|---|---|---|---|----|
| ①  | 5  | 霧    | 白妙の   | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ②  | 6  | 寄思草恋 | 思草    | ○  | ○ | ○ | × | × | ○  |
| ③  | 11 | 三月尽夕 | 春も此   | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ④  | 12 | 海月   | 月に玉   | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ⑤  | 25 | 絶恋   | たか秋の  | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ⑥  | 27 | 瑞籬   | 百くさに  | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ⑦  | 50 | 瑞籬   | うれしくも | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ⑧  | 50 | 祝言   | かきりなき | ○  | ○ | ○ | × | × | ○  |
| ⑨  | 63 | 曉郭公  | 明やらぬ  | ○  | ○ | × | × | × | ○  |
| ⑩  | 73 | 時雨   | けふもまた | ○  | ○ | ○ | × | × | ○  |

所在は、上段は丹鶴濃書活字本の頁数、下段が行数を示す。以下同じ。

※⑥は、本来、丹本・一本になかったもので、他の独自伝本から追補されたものであろうが、一応ここでは○としておく。

この第3表で留意されるのは、穂・金の両本、書・竜の両本が、欠如歌が全く一致すること、加えて、この四本は、他の諸本にある①②④⑤の共通

の欠如歌を有することである。

さて、第3表の欠如歌のうち、①②③④⑤⑦⑧⑩の八首は、定数歌として、すべて存在するのが本来の姿であり、これなきものは、単純な脱落とみてよい。その意味では、内15本、丹本、一本は、一首も脱落歌がない。

(田中氏は、内15本には、第2表③の百首中、「寄朽木恋」〜「渡船」14首の落丁があるとされたが(口論文)、落丁はなく、存在する。)しかし、問題は⑥と⑨の歌である。⑥は、第2表④の百首の末尾に「已下永正云々マテ一本以朱補之」(この注記、活字本は脱落)の次の

百くさに手向おきても言のはをみかける露の玉やなからむ

を指す。実は、この百首は、正徹の定数歌のうち、最も多く独立伝本として流布しており(管見の範囲で18本)、すでに公表したように(拙稿「正徹百首」の諸本と成立について)文学・語学46号)、二系統四類に分れる。丹本や一本(朱で追補)にある、今川氏の判詞や「百くさに」の歌から「永正云々」までの奥付は、「草根集」の定本には本来なかったものであろう。「抄本」にそれがみえないのも、その証左となる。但し、元来、丹本にこの判詞などが追補されていたのか、一本の朱筆による追補か、問題になる。判詞のなかに、二箇所、一本との校異があるので、丹本にも追補されていたと考えるが、この校異「一本イ」の可能性もあり、疑問は残る。

次に、⑨の歌は、第2表の⑩の百首の夏十五首中にある。丹本活字版では、

曉郭公 横雲を空にすゑおく関とみてやすらひあかす時鳥哉

明やらぬ雲のにしきは何かせん鳴ね色こきほとゝきすかな(一本)と翻字しているが、版本をみると、「横雲を」の歌の右側に小字で「明やらぬ」の歌をそえている。「明やらぬ」の歌がなくても、夏歌は十五首あるので、田中氏の言われるように「定数歌ニツキアルベカラズ」(口論文)ということにもなる。

論文)、妥当な見解ではないかと思う。

二つめは、「草根集」の命名が誰れによるものかを示唆する次の部分である。

さるにても此集をなつけしことをたつぬるにそのかみ此道におきてものうきことのありしをりくはなかく筆をたちたうちに跡をけつらんとおもへれとこゝろにねさせるおもひのたねやゝもすれはことのはにあらはれてきれともうせすやけともつきせす秋の霜をおひてはかれはつるやうなれと春の風にふれてもまたもえ出るに似たり故に草根と名つけられたりけるこゝにかの小師に……(丹本による)

この部分でも、諸本間に小異文はあるが、最も重要なのは、傍点部分である。こゝは、「られ」や「たり」の有無により、諸本の本文が次の四つに分れる。

(1) 故に草根と名つけける(一本)

(2) 名つけたりける(扶桑本)

(3) 名つけられける(書・竜・穂・金の各本)

(4) 名つけられたりける(内15・丹・拔書の各本)

この「られ」は、尊敬の助動詞「らる」とみるのが自然と思われる。田中氏は、この問題に対し、「られ」のある(3)(4)に従えば、兼良は、序文で正徹のみ敬語使用をしているので、この文の主語は正徹で、従って命名も正徹自身ということなるうとの想定もされたが、逆に、(1)(2)の「られ」のない方に従うと、命名者は兼良か正広となるが、序文のない「抄本」に、すでに命名があるので、命名者は正広とみるのが妥当であり、「恐らくその抄出の原本(正広編)に正広は「草根(集)」の名称を私的に冠し愛用していたものと推測」され、さらに冒頭の「草根和歌集は招月庵清巖老人の詠草なり」の語勢には「招月老人の詠草に「草根和歌集」なる正式名を与えるという兼良の強い宣言とでもいべきか。」(二論文)と、一本などの後者に加担されたようである。

しかし、先に引用の表現の文脈をたどるとき、この見解は再検討の余地がある。「さるにても此集をなつけしことをたつぬるに」の主語は兼良であろうが、誰れに命名の由来を尋問したのであるか。考えられるのは、正広か正徹であるが、次にくる「そのかみ此道にものうきことのありしをりくは」から「名つけられたりける」までは、兼良としては、本来、正徹の言説を直接引用するつもりであつたらう。なぜ、あのような諸本間の表記にゆれが生じたのか。それは、「なつけしことをたつぬるに」応ずる妥当な結びの表現がないためで、その文脈をすっきりさせるには、「なつけしことをたつぬるに」に対して「故に草根と名つけける」とし、その後「とこたえ給ふ」に類する表現を補うべきである。その妥当な結びが当初からなかったところに、「られ」の補入や削除があつたのではなからうか。故に「草根集」の命名は、正徹自身と考えられるのである。但し、この部分、兼良の序文の当初の表記がどちらであつたかは、にわかには断定できない。兼良自身、「たつぬるに」と正徹の言説を長々と綴ってゆくうち、最初でだしを忘れ、うっかり「名つけられたりける」と結んでしまふこともありうるからである。この場合、正広に命名の由来を尋問したとみるのは、少し唐突である。なぜなら、正広のことは、この後やつと「こゝにかの小師に正広といふ僧あり」と紹介されるのであり、それまでは、正徹の生前の言説を引いているのである。仮りに正広の命名とすると、弟子たるものが、あいつた師の内面の心情に関連する「草根」などという名称をつけたであらうか、はなはだ疑問である。しかも、「そのかみ此道におきて……」の心情は、永享四年の草庵の類火で、詠草がすべて灰燼にきしたときの正徹の「むなしき煙となし侍りぬれは今此道無益に覺てなかくとまり侍るへきよし思なりぬるをととも程あるましき年のすゑなればわつかにあらむかきりはなとかは心をもなくさめさん……」の痛切な心情と重なっている。まさに「草根」の命名者は正徹自身であり、兼良は、正徹の生前、その由来を尋ね知って、その時の会話を序文に直接引用

いといえる。

巻一で、まず第一に問題となるのは、巻一の分巻形式をめぐってである。丹本は二冊に分巻されていないが、書・竜・穂・金（但し、現在は合綴）の各本は、⑦の祇園社法楽詠百首和歌までを、内15本は、⑨の住吉法楽詠百首和歌までを、「抄本」は、⑥の詠一日百首和歌までを、各々上冊とし、以下を下冊とする。このうち、田中氏は、内15本の分巻形式に着目され、形量的に不自然極まるが（上は9、下は4の定数歌）、下冊のはじめの定数歌が、文安六年（宝徳元年）であることと、「草根集」で真に整序された日次和歌が巻七（宝徳元年）以降であるという日次系「草根集」の全体の構成なども考慮し、この分巻形式に、「秘められた古い何かを暗示するかの如くである。」との臆測もされた（詳細は④論文）。この推測は確かに興味深いものがあるが、ただ、内15本巻一の冒頭に「草根集一」として、十三すべての定数歌目録を掲載していること（分巻している諸本は、上下に分けている）、序文付加以前の「抄本」には、⑥までを上冊として、十三すべてを考えると、はたして「古い何かを暗示」しているかどうか疑問である。内15本の巻一は、現在、大へん錯簡が多いが、一度、解体されたとき、たまたま二冊に分巻されたのではなからうか。

兼良に提出した定本では、分巻されていたであろうか。これは、序文の「猶十四五巻（一本てう）」とも関連するのであるが、「抄本」で上下冊に分巻されていたことを思うと、定本でも分巻されていた可能性はある。ただ、「抄本」と書本などの分巻には、⑥までか、⑦までかにずれがあるのが気になる。これは、「抄本」の段階では、⑥までだったが、定本で⑦までにして提出したか、⑦までの折半は分量を考慮した後人の手になるものかである。ともかく、分巻形式は、原本にありえたことで書本なども、その古い姿を伝えている可能性はあろうと思う。

第二に、序文に言及する。

前掲六本と一本には序文があるが、大島本と「抄本」にはみえない。

「抄本」にないのは、序文付加以前の伝本の姿を伝えるものであることが実証されるので問題ないが、大島本は、付加以前の系統本か、単なる脱落か、所在不明なので確証がつかめない。三浦三夫氏のメモによると、①「頓証寺法楽詠六十首和歌」の巻頭五首を欠くことなので、序文を含む冒頭部が落丁した可能性もある。その他、④「聖廟法楽詠百首和歌」にも錯簡あり、他に六丁の落丁もあり、必ずしも善本とはいえないようである。

さて、諸本の序文を比較すると、大幅な異文はみられない。これは、兼良が序文を改稿しない限り当然のことではあるが、二、三問題になる異文は存する。序文本文の異同などに関しては、すでに田中氏の考察があるので（②論文）、詳しくは、それに譲り、ここでは、問題の二箇所に触れるにどめる。その際、「草根集」の序文は、「扶桑拾葉集」（岡山大学本写本を使う）や、類題系に掲載した、内閣文庫本抜書にもみえるので、これらも参照する。

一つは、その冒頭。丹・書・竜・穂・金・扶桑の各本は、草根和哥集は招月庵正徹老人の詠藁なり

とあるが、内15本、一本、抜書本などは、傍点部分が「清厳」とあることである。この異同に関して、田中氏は、

序は正広が請うて兼良より享けたものであり、その表記に二通りあることと自体不審なので、本来、兼良の序には「招月庵老人」とのみあったものが、招月庵を嗣いだ正広の晩年以後において称号の混同を避けるため、誰かによって加えられた注記が本文化したものと考えるのが穏当かと思われるが、正徹は諱（法名）、清厳は字（道号）なので、後人の注記としては清厳とするのが妥当であろう。

とし、兼良の序文に、本来、どちらかの表記があったと考えられる場合も、やはり「招月庵清厳老人」といったらうこと、いづれにせよ、「正徹老人」となったのは、正徹の弟子以外の誰かによると推定されたが、（附

(2)分類方法や内容検討は、(1)和歌の出入(ロ)配列順序、(ハ)詞書の出入、(ニ)和歌・詞書・歌題などの本文異同、(ホ)奥書、などから行う。

(3)各系統ごとの伝本の性格を具体的に指摘する。

(4)原本・定本・補訂本・再編本などを念頭におき、各系統の位置を論じ、相互補訂を行う。

(5)全十五巻を通覧し、全体の系統分類を行いその性格や位置を論ずる。

但し、今回は、本文異同等は逐一列挙せず、ごく主たるものにとどめる。また、系統分類の概略的なものは、すでに田中氏の、数値を介しての詳細な論があるので、それに譲り、むしろ、原本、定本などのことを念頭におき、相互補訂などを行う。これまで調査してきた段階では、文句なく優れた伝本というものはなく、各々に長所と短所を有しており、伝本相互の補訂が強く要請されるのである。

#### 四 巻一について

「草根集」の巻一は、定数歌を収める独自の巻であり、第2表のような十三の定数歌が、ほぼ詠歌年時順に掲載されている(但し⑪と⑫の年時が前後)。

第2表

| 番号 | 定数歌       | 詠歌年時            |
|----|-----------|-----------------|
| ①  | 頓証寺法楽詠六十首 | 応永21・4・17       |
| ②  | 詠五十首和歌    | 応永23・6・19       |
| ③  | 詠一夜百首和歌   | 応永26・10         |
| ④  | 聖廟法楽詠百首和歌 | 応永27・1・17<br>23 |
| ⑤  | 聖廟法楽詠百首和歌 | 永享元・12・7<br>13  |
| ⑥  | 詠一日百首和歌   | 永享3・2・4         |

|   |             |                 |
|---|-------------|-----------------|
| ⑦ | 祇園社法楽百首和歌   | 永享10・6・7        |
| ⑧ | 住吉法楽詠百首和歌   | 永享12・3・18<br>21 |
| ⑨ | 住吉法楽詠百首和歌   | 永享12・11・27      |
| ⑩ | 住吉法楽詠百首和歌   | 文安6・3・24<br>27  |
| ⑪ | 侍春日社宝前詠百首和歌 | 宝徳3・4・21<br>25  |
| ⑫ | 侍長谷寺佛前詠五十首  | 宝徳3・4・2         |
| ⑬ | 侍日吉社宝前詠百首和歌 | 享徳2・3・6<br>9    |

そして、巻二以下の巻で、定数歌詠歌と同年月日の条のあるところには、例えば、⑤であれば巻二の同日の箇所に「北野社参籠百首を奉別紙にあり」と指示している。その他、⑩⑪⑫⑬の詠出時のところにも、ほぼ同様の指示があるが、他は、その年月日を含む詠草が存在していないので指示はない。

伝本の考察にあたっては、兼良の序文があること、各定数歌のなかには、「草根集」とは切り離された独立伝本の存在することが問題となる。前者に関していえば、序文付加のある巻一は、それが後人の追補でないならば、一応、文明五年七月以降の伝本の姿を伝えるものであり、後者に関しては、それが単なる「草根集」からの抜書でない場合、素稿本や原本追究に一つの働きかけをするということである。独立伝本に関しては、すでに拙稿を公表しているので(「草根集」の定数歌について―独立伝本の位置付けと歌題構成の検討―広島大学文学部紀要29巻1号)、詳細はそれに譲り、ここでは、問題になるところだけ参照するにとどめる。

さて、諸本のうち、巻一を所持する伝本は第1表のように、丹本、穂本、書本、竜本、内15本、金本の六本、それに現在所在不明の大島本、加えて「抄本」や校合「一本」が参照となる程度で、他の巻に比較して少な

ような系統図譜を作成する。

などの目標を設定し、最終的には、作者や編者の原本により近い位置にあるものを認定し、その復元を無限に志向するとされる。

「草根集」の場合、諸本を各系統に分類し各系統ごとの特質や特徴を指摘することは可能であろう（系統図譜の作成までゆかないまでも）。しかし、原本により近い伝本とか、原本の復元といったとき、先の成立・流布を勘案するとき我々の目的とする原本とは何を指すかが、改めて問われねばならない。

「草根集」という一個の作品、これは、正広の手によって整理され、兼良の序文を付加したとき、はじめて成立したのであるから、原本とは、文明五年七月、正広が兼良に提出した時の本を指すとの見方もなりたつ。しかし、編者正広の整理作業の完結性という観点からすれば、それ以降に補訂した本（例えば尊9本系）などの復元こそ肝要とも考えられる。また、「草根集」が正徹の作品であることを重視すれば、原本とは、正徹の素稿本、その復元が困難としても、序文付加以前の興俊本系の方が重要な位置をしめることにもなる。

このように、「原本」の考えは、その立場により、種々の理解が可能である。これを認知分別しておかなければ混乱におちいるであろう。

作者正徹の作品を当初の本文の姿で享受するという姿勢に立つとき、原本、原詞書は、あくまで正徹の和歌、詞書の本文復元を志向すべきで、編者正広の改竄や訂正はうけ入れられない。また、編纂作業において、より整理された方向という立場では、重出歌の削除や、巻四、五、六、十五などの完全類題方式の方を優先することになるが、これも、正徹の創作過程理解に支障をきたすこともあり、単純にはわりきれない。

しかし、以下に展開する叙述に際しては、一応、正広が手を加える以前のもの、素稿本、正広の編纂によって、ある程度の体裁をととのえた段階のものを原本、兼良の序文付加の行われた時のものを定本、それ以降、正広

がさらに手を加えたものを、補訂本、さらに後人の手の加わったものを、再編本と各々に呼称しておく。極めて大雑把なわけ方であるが、便宜的なものにすぎない。

それと、今一つ注意されねばならないのは、「草根集」は、全十五巻という膨大な家集であったため、第1表でもわかるように、残欠本や零本が多く、完本は稀少であることである。しかも、その完本、あるいは完本に近い伝本も、個々にみてゆくと、はたして、当初からの一系統の伝本の姿をそのまま伝えているかどうか疑問な諸本もある。現に、竜本は、四冊の古写本と十一冊の新写本の混合本であり、両者は、ほぼ同系統としても、少し趣をことにする。また、丹本の校合に使用された一本は、全十五巻あるが、うち、少なくとも巻一、七、九の三巻は、別系統本の混合本であることが、田中氏によって実証されてもいる（二論文）。内15本も、巻一、三、十三の三冊は、系統の問題はさておき、他の巻のものと書写や体裁も相違する。このようにみても、伝来がはっきりしている「草根抄」や尊6本、尊9本などは、同一系統のまとまりとして処理してよいが、他は、たまたま一括されていても、頭から同一系統と盲信してかかるのは危険な場合もある。

この意味で、私は、まず、巻別の考察を行い、この結果を、一括伝本と有機的に関連付けながら、全体の位置を定めてゆく方法をあえてとることにする。

また、先の書誌的解題でも触れたように、「草根集」は大部であるため、全巻一筆でなく、寄合書のものも多い。同系統の伝本でもその筆者の書写態度の粗雑さ、厳正さによって、随分な差の出てくることもあり、単純にこの伝本は善本であると割りきれないケースもある。

最後に、具体的な作業過程を述べておく。

(1) 各伝本を巻別に分離して考察する。

系統が示唆されていることである。例えば、島9本、内18本、内10本は九卷すべて一致するなど、あらかじめ、同一系統の伝本ではないかと予測させるし、零本でも、巻三のみの沢庵本、島1本、京本、彰本など、巻九のみの東本、静本、宮本なども、その点注意されるのである。

### 三 伝本分類の目的と方法

伝本分類の目的や方法は、文献学的立場から、一応の基準や方向が規定されているが、実際は、その個々の作品の成立・流布、現存諸本の状況などによって、個々の目的と方法を要請されてくるといってよい。従って「草根集」の場合も、その成立や流布の問題はじめ、諸本の状況を、一応、念頭において、方法や目的を定めなければ、統一性のない煩瑣な調査報告に終ってしまう危険がともなう。

「草根集」は、弟子正広が編纂し、兼良の序文の付加を受けた、文明五年七月の成立とされるが、これは形式的なもので、それ以前の流布のケースにも留意せねばならない。現存「草根集」は、最終的には、確かに正広の手によって整理統一されたと思われるが、その内容が日次形式であることでも予測されるように、正徹自身、生前、日々記録を綴りながら、ある程度、まとめていたものもあったと考えられる。安田躬弦が「類題草根和歌集」に採用した、「招月庵詠草」（幻の伝本）の奥書にも永享六年五月の夜から、詠草類を編纂したと記している。大東急記念文庫の正徹自筆の「永享九年詠草」、天理図書館本の「永享五年詠草」などの例でも察知されるように、年次ごとに詠草類を日次のにまとめてもいる。このような各年次の詠草が、正徹自身の手である程度まとめられており、正広はそれに若干手を入れて全十五巻に編成したと想定される。よって、正徹の生前、そういった詠草の一部がかりだされ、部分的に流布するケースもありえたと思う（現に、山名照貴など、正徹の庵から密かに詠草をもちだして披見

している）。

次に、正徹の死後、正広は遺稿を整理して「草根集」全十五巻を完成するが、兼良の序文付加のないものが、少なくとも、文明五年正月十六日以前に成立、流布していたことが、「草根抄」で実証できる。さらに、序文付加以後、同じ編者自身が若干、手を入れて、「草根集」を書写することも幾度かあったろう。その確実な証拠の一つは、尊6本の「文明六年五月九日」の奥書本である。また、その後を受けて、正広の弟子や書写者の間で、改竄や再編の行われることもあったろう。従って「草根集」の成立や伝本流布に関しては、少なくとも、次のような諸本の存在のあったことを想定しておかねばならない。

- (1) 正徹生前の素稿的なもの。
  - (2) 正広の編纂をへた序文付加以前のもの。  
（例えば、文明五年正月の興俊本など）
  - (3) 兼良序文付加時のもの。  
（文明五年七月、兼良本）
  - (4) 正広自身、その後補訂したもの。
  - (5) その後の書写者による改竄、再編したもの。  
（例えば、文明六年五月の毗親本など）
- 文献学的に「草根集」の諸本研究を行うとき、その目的や方法は、この成立や流布と相即しながら展開されねばならない。その意味で、ここで以上のことを確認したわけである。
- さて、伝本研究の目的と方法であるが、文献学的には、一応、一般的な方針として、
- (1) 個々の伝本の書誌的形態を明らかにし、各系統ごとに分類する。
  - (2) 各系統ごとに、その伝本群の性格を明らかにする。
  - (3) 各系統ごとの相互関係を明らかにし、各々の伝本が、ある位置に収まる



縦二四・三糎、横一九・四糎。袋綴写本一冊。卷十三のみの零本。表紙は紺色菱形模様入り。題簽は「草根集全」。料紙は楮紙。一面十三行書。「林崎文庫」の旧蔵印。江戸初期写。

㉔ 正宗文庫本（正宗本）

縦二二・一糎、横一七・二糎。大和綴写本一冊。卷十五のみの零本。表紙は、下地は紺色、金で草花模様をえがく。見返しに金切箔散し。題簽および書名なし。料紙は本来、楮紙だが、鳥の子で裏打ちしてある。一面十二行書。琴山の極札によると、蛭川智蘊筆とするが、信じがたい。ただ、室町期の古写本であることは確実である。

以上が管見できた日次系伝本であるが、次に、直接一見していないもので、少し内容の知られるものを紹介しておく。

㉕ 松浦貞俊氏本（松浦本）

松浦氏の御逝去で遂に一見できなかったが、井上宗雄氏の私信によると、縦二六・五糎、横二二糎で、袋綴写本一冊。卷六のみの零本。縹表紙。左肩に朱題簽で「草根集」。一面十三行書。料紙は楮紙。室町末期写。

㉖ 三浦三夫氏本（三浦本）

先掲の「草根集伝本解題覚書」によると、卷十一にあたる零本で、尊経閣文庫本に近いとのことである。

㉗ 大島雅太郎氏本（大島本）

現在所在不明。三浦氏の解題によると、卷一のみの零本で、兼良の序文なく、室町末の書写とのこと。出現が待望される。

最後に、諸本研究上、参照すべき二本を紹介しておく。

㉘ 丹鶴叢書校合一本（一本）

先述のように、丹本は、類題本と一本でもって校合してあるが、その一本は、一応、全十五巻の完本であり、校合の跡を追うことによって、ある程度、その性格が再現できる。但し、その校合態度が、どの程度厳密に行われているかは疑問なので、所々で参照するとどめる。

㉙ 内閣文庫「草根抄」（抄本）

縦二六・七糎、横二一・七糎。袋綴写本三冊。第一冊は「草根集」の巻一から二〇首、第二冊は、卷六、七から四〇二首、第三冊は、卷十三、十四、十五から三五一首を各々抜書したもの。表紙は青色で、**卍**継ぎの雲母模様入りの紙表紙。左肩に「草根抄」と記す。料紙は楮紙。一面十三行書。第二冊目二三丁表に「文明七年八月自廿五日至廿六日書之」とあり、さらに第三冊目三二丁裏に

写本云、此一部依興俊所望重而書写者也

文明五年正月十六日 正広在判

文明七年九月二日書之

とある。この奥書でも察せられるごとく、この伝本は、文明五年七月の、兼良の序文付加以前の「草根集」の姿の一部を伝える貴重なものであることは、すでに公表したところなので省略する（拙稿「内閣文庫本「草根抄」について」国語国文昭40・8）。

この他、所在の知られるもので調査していないものに、八戸教育委員会蔵八戸南部家旧蔵本に「草根集」三部（五冊本・一冊本・四冊本）がある（佐々木忠慧・片野達郎各氏「東北地方歌書伝本書目稿（その二）」日本文学ノート第五号）。但し、日次系か類題系かも不明。また「琳浪閣古書目録」（昭41・11）に「古写本草根集次第不同近世中期写五冊」や「草根

紙。一面九行書。江戸中期写。「和學講談所」「淺草文庫」はじめ、多くの旧蔵印。

⑬河野信一記念文化館本（河野本）

縦二三・五糎、横一六・七糎。袋綴写本十二冊。但し、うち八冊は類題本で、他の四冊が日次系。巻六（二冊に分巻）、巻九、巻十に該当する。表紙は黄色下地模様入り。題簽は、桃色で左肩に貼付。料紙は楮紙。一面十一行。江戸中後期写。虫損あり。

⑭島原松平文庫本（島一本）

縦二七・七糎、横二〇・二糎。袋綴写本一冊。巻三のみの残欠本。表紙は藍色唐草模様入りの紙表紙。題簽に「續草根集」とある。本文料紙は斐紙。一面十行書。江戸初期写。「尚舍源忠房」「文庫」の蔵書印。

⑮京都大学附属図書館本（京本）

類題本四冊と同じ帙に一括されているが、体裁その他からみて、類題本とは別。縦二四・三糎、横一五・五糎。袋綴写本一冊。巻三のみの零本。改装表紙の内に原表紙あり。題簽は左肩に「續草根集全」とある。料紙は楮紙、一面十一行書。巻末に「徹書記集」とある。室町末期写か。

⑯彰考館本（彰本）

類題本十冊と一括され、体裁や書写者も同一。縦二七・八糎、横一八・八糎。袋綴写本一冊。巻三のみの零本。表紙は薄茶色無地の紙表紙。題簽には「草根部類十一止」とある。料紙は薄様楮紙。書写者は小山田与清とのこと。「潜龍閣蔵書印」あり。

⑰伝沢庵筆本（沢庵本）

この本の存在は、「松井子爵家御蔵品入札」目録で冒頭部分の写真が掲出されていたことで知っていたが、その後、昭和四十三年六月七、八日に開催された、東京古典会入札に出品された。その時、一見することができたが、精査していないし、現在その所在不明。袋綴写本一冊で、巻三に該当。外題は「ねさまし草」とある。伝沢庵筆とあるも、もう少し古い書写とみうけた。美麗な筆跡で善本のごとく思われた。

⑱静嘉堂文庫本（静本）

縦二六・五糎、横一九・一糎。袋綴写本一冊。巻九のみの零本。表紙は、青色の下地に桐葉模様入り。題簽に「續草根集徹書記撰完」とある。料紙は楮紙。一面十二行書。所々に朱筆でミセケチ、補入などみえる。奥書は朱筆で、文化三丁卯九月盡書写一校畢併落字闕譌繁多得善本而可及加筆也 楊柳園三世とある。従って書写は文化四年とみる。

⑲東京大学国文研究室本居文庫本（東本）

縦二三・六糎、横一六・一糎。袋綴写本一冊。巻九のみの零本。表紙は草色下地に菱形模様入り。「續草根集全」と題簽を貼付。料紙は楮紙。一面十二行書。江戸中期写。「本居文庫」「藤垣内印」の蔵書印。

⑳宮城県立図書館伊達文庫本（宮本）

縦二七・二糎、横一九・五糎。袋綴写本一冊。巻九のみの零本。表紙は褐色下地に菱形模様入り。「續草根集」と左肩に直書す。一面十一行書。料紙は楮紙。江戸中期写。

㉑神宮文庫本（神本）

⑦ 尊経閣文庫六冊本（尊6本）

縦二七糎、横二〇・七糎。袋綴写本六冊。巻四、八、十、十三、十四、十五のみの残欠本。表紙は上下打曇。題簽はなく、もと各冊の左肩に「草根集」と直書されていたらしいが、今は薄れている。一面十一行書。料紙は楮紙。巻十五の奥に

なき人の庭のをしへそ道の草

ねこしてうつせ花にさくまで

為藤原毗親書也

文明六年五月九日 正廣

とある。六冊は、二人の寄合書であるが、牛庵は、極札で、三冊は「正徹門人正廣筆」、他の三冊は別筆と鑑定している。極札を信用すれば、この書写も文明六年となるが、まだ検討の余地がある。ただ、この本が、室町中期の書写であることは確かで、管見に及んだ「草根集」諸本中、最古の写本である。その上、正広の奥書をもつなど、貴重な伝本である。

⑧ 尊経閣文庫九冊本（尊9本）

縦二七・二糎、横二二・二糎。袋綴写本九冊。巻二、三、四、五、八、十、十一、十二、十五の残欠本。表紙は青白色の紙表紙。題簽は左肩に白色楮紙に「草根集徹書記」とある。料紙は厚手の楮紙。一面十二行書。「妙覺寺<sup>住持</sup> 日典」なる蔵書印。室町後期書写。巻十五の奥に、尊6本と同様の奥書があり、尊6本を忠実に書写したもようである。但し、尊6本には、巻二、三、五、十一、十二の諸巻が欠けているので、この尊9本も存在意義をもっている。

⑨ 島原松平文庫本（島9本）

縦二七・八糎、横二二・一糎。袋綴写本九冊。巻三、四、六、七、十、

十一、十二、十三、十四の残欠本。表紙は濃青色無地の紙表紙。見返しに金銀の切箔散し。料紙は楮紙。一面十二行。書写は室町最末期頃か。

「島原秘蔵」の蔵書印。数人の寄合書であるが、各冊末尾の極札の筆跡鑑定には、巻三（正殷）、巻四（心教）、巻六（行助）、巻七（正孝）、巻十（行助）、巻十一（正孝）、巻十二（正孝）、巻十三（心教）、巻十四（正孝）とみえる。おそらく、心教は心教、正孝は正広のことと思われるが、この極札をそのまま信じるのは危険であろう。

⑩ 内閣文庫十八冊本（内18本）

縦二八・二糎、横一八・七糎。袋綴写本十八冊。但し、このうち、日次系に属するのは、巻三、四、六、七、十、十一、十二、十三、十四の九冊で、残り八冊は類題本、一冊は「正徹千首」である。表紙は紺地に草花模様。料紙は楮紙。題簽は剝脱したものもあるが、現存するものには「草根集統第一、永享五年至文安四年」などがある。一面九行書。江戸中期の書写で、「昌平坂学問所」「浅草文庫」その他の旧蔵印がある。

⑪ 内閣文庫十冊本（内10本）

縦二七・三糎、横一九・五糎。袋綴写本十冊。うち一冊は「正徹千首」、他の九冊は日次系の諸巻で、巻名は、内18本と同一。表紙は褐色無地の渋紙表紙。題簽は左肩に「統草根集第一永享五年至文安四年」などと記す。料紙は楮紙。一面九行書。書写は江戸中期。「日本政府圖書」などの旧蔵印。

⑫ 内閣文庫四冊本（内4本）

縦二六・八糎、横一九・二糎。袋綴写本四冊。巻三、四、七の残欠本で、残り一冊は「正徹千首」。表紙は薄褐色の渋紙表紙。題簽は「草根<sup>改</sup>八」などとあり、本来、もっと冊数のあったものと思われる。料紙は楮

紀州新宮の城主水野忠央が、嘉永二年に出版したもの。縦二六・三種、横一八・二種の版本十五冊（完本）。表紙は、丸型鶴の浮き様の模様入り。一面十行。巻十五の奥に、

右草根和歌集全部以飛鳥井前亜相雅章御本令繕写畢

寛文十三年林鐘上旬

右草根集以一本并類題對校了

とある。即ち、飛鳥井雅章本を繕写した系統の本を底本とし、別本類題本で校合した本ということになる。以下、丹本と称したときは、一本や類題本の追加や補訂などを除去した本文を指す。版本は書陵部・早稲田大学図書館はじめ、所々に蔵せられている。大正元年、国書刊行会より、活字印刷して刊行された。今日までの正徹研究の大部分は、この活字版をもとに展開されてきた。

## ②穂久邇文庫本（穂本）

縦二六・四種、横一八種。袋綴写本十六冊（完本）。表紙は空色、金沙子散。左肩に「草根集一之上」などと書名を記す。一面十行書。歌題は、歌の頭部にある。料紙は楮紙。江戸中期写。西荘文庫の旧蔵印。第十六冊（巻十五）の奥に、

右草根和歌集全部以飛鳥井前亜相雅章御本令繕写畢

寛文十三年林鐘上旬

と丹本の前半と同一のものがある。

## ③書陵部本（書本）

縦二八・五種、横二〇・五種。袋綴写本十七冊（完本。うち一冊は類題本）。表紙は、素地に藍色菊花折枝模様入り。各冊の表紙の左肩に、鼠色の鳥の子題簽を貼付する。一面十二行書。料紙は斐紙。書写は江戸初。『圖書寮典籍解題文学編』によると、題簽は靈元天皇の御宸筆とす

る。全冊は一筆でなく、数人の寄合書。奥書の類はない。

## ④竜門文庫本（竜本）

縦二六・六種、横二〇・八種。袋綴写本十七冊（完本、うち一冊類題本）。この竜本は、完本ではあるが、書写時期を異にする、新古二種にわかれる。巻四、六、七、九、（類題一冊）が、室町末の書写で、他の十二冊は江戸初期の補写。表紙は、乳白色下地に藍色山水・花鳥の絵。料紙は、古写本は楮紙、新写本は斐紙。時代箱の側面に

釋正徹拾七冊

草根集 飛鳥井家旧蔵

雅章卿補写

と墨書されている。『龍門文庫善本書目』（川瀬一馬氏解説）によると、「日野角坊文庫旧蔵」とみえる。

## ⑤内閣文庫十五冊本（内15本）

袋綴写本十五冊は、大型版と中型版の二つに分れる。大型は、縦二八種、横二三種、小型は、縦二六・六種、横二〇・五種、共に室町末から江戸初の書写か。表紙は、両型とも、空色草花模様入りの鍛子表紙。料紙は厚手の楮紙。一面十二行書。十五冊ではあるが、第一冊と第十五冊は、巻一を分離したもので、巻十五（残葉）が欠けている。数人の寄合書で、奥書の類はない。

## ⑥金沢市立図書館稼室文庫本（金本）

縦二四種、横一七種。袋綴写本一冊。但し巻一・巻三、巻八・巻十一、巻十二・巻十五の三冊分を一冊に合綴している。従って巻四、五、六、七の四巻を欠く。表紙は膚色無地。題簽は左肩で、金泥散らし。料紙は雁皮紙。一面十行書。江戸中写。穂本と全く同一の奥書をもつ。

未精査伝本もあるが、このあたりで結果を報告し、叱正を仰ぎたく思う。

まず、今回は、日次系伝本の調査報告を行うが、この方面に関しては、先述のように、田中氏のものがあり、重複するところも、かなりでてくるであろう。しかし、田中氏の触れられていない伝本や問題箇所もいくつもあり、後述のごとく、巻別による処理、「草根抄」の参入、本文校合の問題などを導入して、できる限り独自の方針で、系統分類や本文校訂を遂行してゆくつもりである。上編は、紙面の都合もあり、伝本の概要、伝本分類の目的と方法、巻別では、巻一、巻二、あたりまで報告するつもりである。

## 二 伝本の概要

「草根集」の諸本は、先述したように、大きく、日次系と類題系に分類できる。類題本に関しては、別稿を用意する予定なので、ここでは、その諸本の流布状況を察知するために、管見できたものを中心に、その所在と冊数のみを列挙しておく。一応、片山氏の二十二本は、すべて実見できたので、まず、それを、氏の分類にそって掲載しておきたい。

- 第一種 島原松平文庫本(七冊)・岡山清心女子大黒川文庫本(七冊)・松浦貞俊氏本(十二冊)・陽明文庫本(一冊)・東福寺栗棘庵本(十冊)・彰考館小山田本(十冊)(十一冊の内)・東大国文研究室本居文庫本(六冊)・徳山毛利家本(五冊)
- 第二種 書陵部本(九冊)・書陵部本(一冊)陽明文庫A本(十冊)・陽明文庫B本(十冊)・天理図書館本(十一冊)
- 第三種 竜門文庫本(二冊)(十七冊の内)・書陵部本(二冊)(十七冊の内)
- 第四種 野坂本(五冊)

第五種 京都大学附属図書館本(四冊)(五冊の内)・内閣文庫本(八冊)

(十八冊の内)・内閣文庫本(五冊)・内閣文庫抜書本(八冊)

(九冊の内)・書陵部本(八冊)・竜門文庫田村本(八冊)

以上のほかに所見のあるものは、まず、第一種に属するものとして ①宮城県立図書館伊達文庫本(十三冊) ②神宮文庫本(恋部一冊) ③高松宮家本(春部一冊) ④竜谷大学図書館本(冬部一冊) ⑤佐賀大学本(春部残欠本一冊)などがあり、第二種では、管見していないが、⑥孚齋文庫本があり(『現代教養百科事典』の「草根集」のところに巻頭部分の写真掲載)、第五種には ⑦今治市河野信一記念文化館本(八冊)(十二冊の内)、⑧同館蔵四冊本(これは三浦氏の紹介された、大島雅太郎旧蔵本と同一写本とみられる。「大島図書」「青谿書屋」の旧蔵印がある。)

また、⑨金沢市立図書館黒本文庫本は、伝足利義尚筆の類題秋部一冊であるが、先の五種に同類のものをみない。もともと、第三種は夏部のみで残欠本なので、この種に属するかどうかは、さらに検討を必要とする。他に、⑩穂久邇文庫本(春・恋・雑三冊)、および ⑪山口女子短大図書館本(六冊)は、各々、先の五種にみえない独自の類題本で、六種、七種と称してよい。私信によると、久保田淳氏も類題本を所蔵されているとのことである。<sup>補注1</sup>

このように、類題本は、片山氏の報告された、二十二部のほか、さらに、十一部が追加され、総計三十三部となり、七種(または八種)に分類できる。もって、類題本の流布や利用状況が察知されるであろう。この伝本の流布は、次に述べる日次系伝本を凌駕しており、「草根集」が、その歌題集成の書として享受されていたことを如実に示すものである。

次に、日次系伝本をごく簡単な書誌的解題を加えながら紹介する。掲載順序は、一応ここでは、完本から残欠本へという方針にそって行いたい。

①丹鶴叢書本(略号―丹本)

# 日次系草根集伝本考(上)

稲田利徳

## 一 伝本研究の状況

正徹に関する研究は手薄であるといわれながらも、私の収集した関係論文は、実に、百六十編の多数にのぼる。しかし、その大部分の論文は、基本資料となる家集「草根集」の本文を、唯一の活字本である丹鶴叢書本(国書刊行会)に依拠しており、諸本を通覧しての本文研究は、極めて稀少である。

まず、戦前「招月庵正徹伝攷抄」(水滸昭10・6)なる優れた伝記を發表されていた、三浦三夫氏は、その時の調査メモをもとにして、「草根集伝本解題覚書」(名古屋学院論叢?)を執筆されたが、これは、伝本研究の嚆矢である。日次系伝本十四本、類題系伝本八本、合せて二十二本の多くの諸本を「解題」されたが、まだ、系統分類とか本文性格認定の段階までは論及されていない。それでも、現在、所在不明の、大島雅太郎旧蔵本の紹介などもあり、伝本研究の先鞭をつけられたものとして意義をもつ。

次には、類題本草根集の諸本を分類された、片山享氏のもの注目される。これは、中世文芸叢書「野坂本草根集」(昭和40・12刊)の解題に試みられたもので、類題系諸本二十二本を収集し、五種に分類された労作である。しかし、当然のことながら、底本である野坂本の性格究明を中心におかれているので、他の系列の類題本の性格付けは、まだ、充分に遂行されてはいない。

「草根集」の伝本調査は、類題系よりも日次系の方を重要視しなければ

ならないが、その方面の本格的な研究は、近年、田中新一氏によって、精力的に持続され、その成果は、(イ)「神宮文庫蔵『草根集』の資料的価値」(愛知学芸大学国語国文学報21集昭42・12)、(ロ)「内閣文庫蔵『草根集』(十五冊本)の研究―仮称「春本系」の解明―」(国語国文学報23集・昭44・12)、(ハ)「『草根集』(秋本系)の再建」(愛知教育大学研究報告20輯・昭46・3)、(ニ)「『草根集』秋本系欠巻の発見」(愛知教育大学研究報告21輯・昭47・1)、(ホ)「『草根集』の伝流―仮称春秋本系の展開―」(『中世文学の研究』昭47・7)などに公表されている。(以下田中氏の論文指示は(イ)(ロ)などの略号による。)田中氏は、日次系の諸本を、仮称として、春本系、春秋本系、秋本系の三類に分類され、各々の伝本の性格や、特に、秋本系の伝本再建などに力を注入された、精細な労作であり、日次系諸本研究の最高水準にたつものである。ただ、論文の発表手順が、現存伝本を、一応すべて収集し、その上で系統分類されたものでなく、めばしい伝本を調査された段階ごとに、逐次的に報告されているため、内容が、いささか複雑で、煩瑣なものとなっているのはいぬめない。

私も、先の三氏とは別途に、ここ十年ばかり、「草根集」伝本の調査を続けてきたが、大部な家集で、なかなか作業がはかどらず、内閣文庫の「草根抄」の検討(国語国文昭40・8)のほかは、本格的な伝本研究の論文を公表することがなかった。

このほど、現存伝本として知られるもののうち、三、四本を除き、一応、管見でき、主要な日次系伝本間の本文校合もあらかた完了したので、